

平成一八年度卒業式 式 辞

「ふりつちもる雪にもしるき梅の花 清き香のあればなりけり」と謳われた、二高八景の一つ清香苑(せいこうえん)の梅も、清らかに春の訪れを告げる季節となりました。広瀬の川面に写る陽光のきらめきに、万物躍動の確かな兆しを感じられる、今日のこの佳き日に、同窓会会長西澤潤一先生、PTA会長内田正之様を始め、多数のご来賓、並びに保護者の皆様方のご臨席を賜り、宮城県仙台第二高等学校「第五十九回卒業式」を、このように盛大に挙行できますことは、卒業生はもとより、教職員、在校生一同にとってこの上ない喜びであり、心より厚く御礼申し上げます。

ただ今、本校の業を修めた三二〇名の皆さんに、卒業証書を授与いたしました。卒業、誠におめでとうございます。また、これまで、ご子息を大きな愛情で包みながら、支え、励まし、共に歩いてこられた、保護者の皆様方におかれましては、ご子息の晴れ姿を前にして、感慨もひとしおのことと、心からお喜び申し上げます。入学以来、百有余年の歴史と伝統の中で培われてきた、この仙台二高の精神風土の中で、至誠業に励み、雄大剛健の風を養い、ともに敬愛切磋しながら、今日まで歩んできた卒業生の皆さんの胸には、言葉では語り尽くせない、多くの思い出が、いま静かに甦ってきていることと思います。かつて、日本の誇る哲学者西田幾太郎は、母校である旧制第四高等中学校を振り返り、「過去の思い出なくして我というべきものはない。過去の思い出が我というものの存在を意味するならば、四高の思い出は私というものから除き去ることのできない私の大部分をしめている」と、書いておりますが、皆さんが、この仙台二高で、ここにいる仲間達とともに過ごした日々の思い出も、まさにそのようなものとして、皆さんの中で生き続けてくれることを願うものであります。

さて、皆さんは、これまで男子校として歴史を刻んできた本校に、共学校という新たな枠組みが示された、大きな転換の時期に、この学舎で過ごしました。そして、そのような時期を過ごす中、皆さんは、本校のこれまでの歴史と未来について、様々な思いを抱いたことでありましょう。凱歌三番に、「血涙こめて築き得し、光栄(はえ)の歴史を今にして」と謳われておりますが、今、確かに言えることは、この時期にあって皆さんが抱いた仙台二高に対する思いは、二万六千を超える先輩諸兄が、まさに血涙を込めて築いてきた、光栄(はえ)ある歴史に対する、敬意に根ざすものであったということ、そして、一世紀を超える本校の歩みに敬意を表するが故の、皆さんの思いの一つ一つは、仙台二高の未来への礎石として、これからの本校の歴史を支えながら、確かに生き続けていくであろう、ということでもあります。

老子の言葉に、「江海(こうかい)のよく百谷(ひゃっこく)の王たるゆえんは、その善くこれに下るをもつてなり。故によく百谷の王たり」とあります。「百川(ひゃくせん)の流れを集める大河と海、それは川の王者である。川より低く位置するから、川を集めて王者となる」という意味であります。この大きな転換の時期を過ごす中で、皆さん一人一人が抱いた思いは、大河があらゆる流れを受け入れながら海を目指すように、仙台二高の歴史という大きな流れとなって一つに合流し、大海原を目指すでありましょう。「広瀬川 わが思い 永久(とこしえ)に尽きざらん」と、凱歌にも謳われているように、清き広瀬の流れとともに、皆さんの熱き思いも、

仙台二高の歴史の中で、永久（とこしえ）に尽きることはない、と、確信するものがあります。そして、皆さんが、先輩諸兄の血涙を込めた歩みに、敬意を表したのとまったく同じように、これから二高で学ぶであろう後輩たちも、皆さんへの敬意を、決して忘れることはないだろう。そう固く信ずるものであります。どうか皆さんも、後輩たちを信じ、大きな心で見守り、応援していただきたいと思ひます。

さて、世界は、かつての二極化から多極化へ、と変化する中、国際政治の分野では、さまざまな不安定要素を抱えながら、多様な価値観の共存を可能にする、これからの世界の在りようが模索されております。また、国際経済の分野では、IT技術の急速な発展により、世界全体がひとつの市場となり、競争の激化に伴う格差の拡大などが、大きな問題になっております。さらに、人口爆発ともいわれる、世界全体の急激な人口増大と、それに伴って進行する産業化は、深刻な環境破壊や地球温暖化、さらには資源不足などの、多くの深刻な問題を、生み出しております。そして、今、世界の叡智を結集して、これらの問題を解決するための努力がなされております。このような中、これからさらに高度な学びを経て、世に出て行こうという、皆さんに託された役割には、非常に大きいものがあります。そのような役割を担うべく、今日、この仙台二高を旅立とうとしている皆さんに、二つのことを期待しはなむけといたします。

一つは、自分の生命を打ちこむことができる仕事を見出して欲しい、ということでもあります。かつて夏目漱石は、これから世に出て行こうとしている学生たちに、「自分の鉱脈を自分の鶴嘴で掘り当てる」まで努力することが大切である、ということ、を訴えました。そして「此处に自分の進むべき道があった！ 漸く掘り当てた！」こういう言葉を、心の底から発することが出来たときに、初めて、心を安んずることができ、容易に打ち壊されることのない、自信が生まれてくる、と語りかけました。自分の鉱脈を掘り当てるとは、言い換えれば、もって生まれた自分の個性が、本来の居場所を探り当てることであり、本来の自分自身に出会うことでもあります。

孟子の言葉に「なすことある者は、たとえば井を掘るがごとし。井を掘ること九仞（きゅうじん）、而（しかれど）も泉に及ばざれば、なお井を棄つとなすなり」とあります。「ひとつの事業を行うのは、井戸を掘るようなものである。いくら深く掘っても、水脈に達しないうちに止めてしまえば、井戸を棄てたも同然だ」という意味であります。漱石の言葉、そして、孟子の言葉から学ぶべきことは、自分の鉱脈を掘り当てるまで、鶴嘴を振るい続ける努力、水脈に達するまで、掘り続ける努力の大切さ、でありましょう。そのような努力が、真に自分の生命を打ち込める、一生の仕事を見出すことにつながるものと、思ひます。

二つ目は、これからの努力の基準を、「世界水準」に設定して欲しい、ということでもあります。皆さんがこれから生きていく場所は、好むと好まざるとにかかわらず、世界という場です。従って皆さんの、これから努力の基準、あるいは目標の基準は、文字どおり「世界水準」でなければなりません。地球規模に肥大化してしまったださまざまな課題、それらの解決に向けた努力は、世界の同世代の人々と連携し、ともに、新しい地球の秩序と、真の豊かさを目指すものでなければなりません。

かつて、東北の地に生まれ、「願わくばわれ太平洋の懸け橋にならん」との大志を抱いて、世界に学びを求め、後に、国際連盟事務局の、事務次長として、世界平和のために、大きな貢献をされた、新渡戸稲造博士は、その思想と実践において、正に世界の人でありました。新渡戸博士が、自らの行動を通して示されたものは、「西洋と同等のもう一つの文明」、即ち「東洋」がある、ということ、そして、東洋のビジョンそのもの、でありました。新渡戸博士が、六年半に及ぶ事務次長の任を終えシユネープを去る時、国際連盟事務局を構成する、世界四十数カ国の代表約六百人のスタッフ一同は、心からの尊敬の念をこめて、新渡戸博士に送別の言葉を贈ったと言われております。その中に、次のような言葉があります。「いつの日か、東洋と西洋との間にある広大な距離をつなぐ、橋になりたいとの、あなたの少年時代の夢は、今、あなた自身の行動によって、現実のものとなったのです」。送別の辞の中に記されたこの言葉は、日本人、新渡戸稲造博士が、「世界の人」として受けた、賞賛の言葉といえるのではないのでしょうか。そして彼らは、この賞賛の言葉とともに、永きにわたる任を終え、国際連盟という、いわば平和の砦を去ろうとしている新渡戸博士に、通過の時に必要な合言葉を贈る、という表現をもって、最大の敬意を表しました。その合言葉とは、*Pass friend*（友を通しなさい）、というものであります。そして、これには「戻りたくなったら、いつでも戻ってきて下さい」という、事務局員一同の、心からの願いも込められていた、ということでありました。世界平和のために、世界各国からの代表で構成される、国際連盟事務局、そのすべてのスタッフから贈られた、「友」という言葉は、いかなる肩書きにも勝る、最高の称号といえるのではないのでしょうか。この「友」という、最も名誉ある称号を、日本人としての、自らの行動によって獲得するに至った、新渡戸稲造博士のこの姿に、「世界水準」とは何かを、学び取ることができるのではないのでしょうか。

卒業生の皆さん、いよいよ皆さんの時です。世界の状況を正視しながら、世界のために自分がなし得ることを見いだすこと、即ち、自分の鉞脈を掘り当てること、そのための学び、それこそが、これからの皆さんの努力が目指す方向であって欲しいと願っております。そして、青年新渡戸稲造が「願わくばわれ太平洋の懸け橋にならん」との大志をもって世界に学び、自らの行動を通して、その志を現実のものとしたように、皆さんにも、高い志をもって、世界の同世代の人々と連携し、ともに、新しい地球の秩序と豊かさを求め、未来を目指して欲しいと思います。そのような地球市民としての努力の中で、最も名誉ある称号は「友」、そして、共有をめざすべき合言葉は、*Pass friend*、でありましょう。平和で豊かな未来を目指す歩みの中で、卒業生の皆さんが、やがて、地球市民としての名誉ある称号を得て、世界の平和と人類の幸福を守る様々な砦を、*Pass friend*という合言葉で、自由に通過し活躍している姿を思い浮かべ、大きな期待とともに、夢を託したいと思います。

最後に、イギリスの詩人ウィリアム・ブレイクの次の言葉を贈ります。「一粒の砂に世界を見、一輪の花に天を見る。掌（てのひら）に無限を握り、一時（いちじ）の中に永遠を握る」。基準を世界水準に求めるということは、決して身の周りにある、小さな存在を、次善のものとするものではありません。また、遠く未来に夢を馳せ永遠を想うことは、今という時を、軽視することではありません。世界水準をめざ

し、未来に夢を抱くということは、例えて言えば、一粒の砂にも一つの世界を見、一輪の野の花にも、宇宙を感じる事ができるような、「感性」に支えられてはじめて、生きた意味を持ち得るものである、と思います。皆さんは、これから、さらに高度な学びを積み重ね、将来、さまざまな分野で、リーダーとしての役割を担っていくことでありましょう。皆さんには、混迷極まる現在の世界に、新しい秩序と豊かさをもたらすための、次の世代のリーダーとして、大きな期待を寄せますとともに、皆さんのリーダーシップには、一輪の野の花にも、真理を見、命を感じ、それを慈しむことができるような、豊かな感性の裏打ちを、期待するものであります。

皆さんの、今日までの努力に敬意を表します。そして、明日からの努力が、皆さんの人生を、豊かに切り拓いていくものとなりますように、心から祈ります。

終わりに、ご多用の中、ご臨席を賜りましたご来賓並びに保護者の方々に、改めて感謝申し上げ、皆様方のご健勝とご多幸をお祈り申し上げますとともに、卒業生諸君の洋々たる前途に幸多からんことを心から祈念し、式辞といたします。

平成十九年三月一日

宮城県仙台第二高等学校長 柏葉浩明